

# ジュニアスポーツリーダーの育成と評価

—質的・量的アプローチによる講習会の効果測定—

高見 彰\*  
 山口泰雄\*\* 伊藤克広\*\*\* 鷗木千加子\*\*\*\*  
 井原一久\*\*\*\*\* 坂元美子\*\*\*\*\* 秋吉遼子\*\*

## 抄録

子どもの体力低下や生きる力の低下が社会問題になる中,子どものリーダーシップの強化が期待されている。「こうべジュニアスポーツリーダー講習会 (KJSL)」は,神戸市内の中学2年生を対象とし,学校部活動や地域のスポーツクラブなどで活躍できるスポーツリーダーを育成することを目的としている。本研究の目的は,KJSL参加の中学生を通して,ジュニア世代が求める運動・スポーツに対する専門的知識の内容とレベルを明らかにし,専門的能力を身につけるためのプログラム効果を量的・質的アプローチの両面から検証することにある。

平成23年度KJSL講習会において参加中学生のプリ・ポスト調査を実施し,さらに講習中の参与観察を実施することで受講生のリーダーシップに対する行動変容の裏づけを行った。量的・質的アプローチ次のことが明らかになった。

1. 「生きる力」測定によりでは,講習後心理的社会的能力の高まりが見られ,統制群の比較においても全般的な高まりがみられた。
2. 「リーダーシップ特性」では指導実習の影響から指導力の項目で高まりが顕著であり,統制群よりもすべての項目ですぐれていた。
3. 「運動・スポーツに求めること」では「自分自身の健康管理」,「チームメイトへの配慮」,「チーム・マネジメント」に対する意識が高まったことがうかがえ,統制群よりも積極的に運動・スポーツに取り組む姿勢がうかがえる。
4. 「専門的知識・能力」ではすべての項目において有意な差がみられ,統制群との比較においても講習会を受講することで,専門的な知識や技術が身につくことが明らかである。
5. 観察参与では,受講生全体が回を重ねるごとに緊張感が解け,積極的に集団に関わりを持つようになっているのが確認できた。中でもコーディネーショントレーニングにおける指導実習は,コミュニケーション力を身につける動機づけになっていた。

以上の結果からKJSL講習会は,青少年のコーチング能力,コミュニケーション能力やコーディネーション能力を高めるのに効果的であることが示唆された。

キーワード：リーダーシップ,ジュニアスポーツリーダー,リーダーシップ講習,  
量的アプローチ,質的アプローチ

*	大阪国際大学	〒570-8555	守口市藤田町 6-21-57
**	神戸大学大学院	〒657-8501	神戸市灘区鶴甲 3-11
***	兵庫県立大学	〒651-2197	神戸市西区学園西町 8-2-1
****	甲南大学	〒658-8501	神戸市東灘区岡本 8-9-1
*****	NPO法人アスロン	〒659-0015	芦屋市楠町 11-17
*****	神戸女子大学	〒654-8585	神戸市須磨区東須磨青山 2-1

# An evaluation of training course for junior sport leaders

—Focusing on quantitative and qualitative approaches—

Akira Takami \*  
Yasuo Yamaguchi\*\*      Katsuhiko Ito\*\*\*      Chikako Ikarugi\*\*\*\*  
Kazuhisa Ihara\*\*\*\*\*      Yoshiko Sakamoto\*\*\*\*\*      Ryoko Akiyoshi\*\*

## Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of training course for junior sport leaders who took part in the Kobe junior Sport Leader Course in 2011 by using quantitative and qualitative approaches. The subjects were 116 students (including 86 control group). The effects of training course were examined by using inventory in pre- (before course) and post-(after course) design for junior high school students and participant observation. The inventory was constituted by 5 factors (IKR, leadership character, attitude for sports, technical knowledge and skills, attribute).

The major findings were follows:

- 1) The psychological and social abilities showed significant changes between pre- and post- tests than the control group.
- 2) In the leadership behaviors, coaching ability scores changed remarkably.
- 3) In the attitude toward sport, the subjects showed strong interest in self-health management, consideration for teammate and team management.
- 4) Regarding technical knowledge and skills, the subjects showed significant changes between pre- and post- test than the control group.
- 5) The participant observation showed that the subjects were becoming opened up to each other through the training program.

The results suggested that the training course was effective for the development of coaching ability, the communication ability and the coordination training for early adolescents.

**Key Words :** leadership, junior sports leader, leadership course, quantitative approach , qualitative approach

---

\* Osaka International University 6-21-57 Tohdacho, Moriguchi, Osaka 570-8555 JAPAN

\*\* Kobe University 3-11 Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657-8501 JAPAN

\*\*\* University of Hyogo 8-2-1 Gakuennisimachi, Nishi-ku, Kobe 651-2197 JAPAN

\*\*\*\* Konan University 8-9-1 Okamoto,higashinada-ku,Kobe 658-8501 JAPAN

\*\*\*\*\* Athlon 11-17 Kusunokicho ,Ashiya 659-0015 JAPAN

\*\*\*\*\*Kobe Women's University 2-1Higashi Suma Aoyama,Suma-ku,Kobe 654-8585 JAPAN

## 1. はじめに

文部科学省が昭和39年から始めた子どもの体力テストの結果は昭和60年をピークに現在まで25年間低下傾向がみられ、青少年の全国調査（笹川スポーツ財団2010）でも、子どもの運動実施において二極化が顕著になっていることが報告されている。平成18年のスポーツ振興基本計画における政策目標の中でも「子どもの体力向上」があげられ、①子どもの体力向上の国民運動を展開し、②子どもを惹きつけるスポーツ環境を充実させる、として様々な事業が展開されている。しかし、プログラム参加者の子どもたちは、常に受け身で、自ら主体的に行動することをねらったものは少ない。

こうした状況を受け、平成22年度より神戸市では「こうべジュニアスポーツリーダー育成委員会（兵庫体育・スポーツ科学学会、財団法人神戸市体育協会、神戸市教育委員会の3者で組織）」が組織され、「こうべジュニアスポーツリーダー講習会（以下KJSL）」を運営、実施している。本講習会は、神戸市内の中学2年生を対象とし、3つのC【Coaching（トレーニング理論、安全管理、栄養指導）、Communication（リーダーシップ、チームビルディング、協力・協働）、Coordination（コーディネーショントレーニング、ストレッチング、調整力）】を学ぶことにより、学校部活動や地域のスポーツクラブなどで活躍できるスポーツリーダーを育成することを目的としている。講習内容は、表1に示す通りであるが、それぞれの講習内容については、テキストが作成され、大学教員及びスポーツNPO指導者により、段階的、継続的に指導がなされている。

中学生のスポーツリーダーの育成はイギリス、ニュージーランドでは早くから取り組まれているものの、わが国では新しい試みである。

講習会の効果測定については、山口ら（2011）が平成22年度同参加者を対象に、講習会前後における意識の変化について調査し、運動・スポーツ実施時の留意点、運動・スポーツに対する専門的知識の有無、有能感について効果がみられたと報告している。

本研究ではさらに講習会における態度変容の効果を調べるために、橘ら（2001）が「生きる力を構成する指標」をもとに開発した「IKR(生きる力)評定用紙（簡易版）」を一部準用している。IKR評定用紙は自然体験活動、野外活動の効果測定に用いられることが多く、橘ら（2003）は自然体験活動67事業を対象に調査を行い、自然体験活動は「徳育的能力」よりも「心理的社会的能力」に効果があったと報告している。

本研究を通じて中学生世代が求める運動・スポーツに関する専門的知識の内容とレベルを明らかにすることで、ジュニア対象のスポーツ育成講習会の

新たなモデルを構築し、「子どもの体力向上」施策に提言するものである。

表1 こうべジュニアスポーツリーダー講習会の内容

<b>1日目(1月21日)9:00~ 12:30</b>
(プレテスト)
ガイダンス
栄養の基礎
リーダーシップの基礎
アイスブレイクの手法
コーディネーショントレーニング
解散
<b>2日目(1月28日)9:00~ 13:30</b>
安全の基礎
コーディネーショントレーニング
スポーツと栄養
お弁当タイム
解散
<b>3日目(2月4日)9:00~ 13:00</b>
安全チェック
栄養バランスチェック
チームビルディングのためのゲーム
コーディネーショントレーニングの指導実習
修了式
(ポストテスト)
解散

## 2. 目的

本研究の目的は、平成23年度KJSL講習会において参加中学生の「生きる力」、「リーダーシップ」、「運動・スポーツに求めるもの」、「専門知識・技術」に関するプリ・ポスト調査を実施し、さらに講習中の参与観察を実施することで受講生のリーダーシップの行動変容の裏付けを行う。加えて非参加者（一般生徒と運動部所属生徒）を統制群として質問紙調査を行い、KJSL講習会における効果の妥当性を高めることにある。

## 3. 方法

### 3-1 調査の概要

調査内容については、図1に示すとおり、①と②の調査では、講習会の効果について量的アプローチを行った。①では講習会初日のオリエンテーション時に調査票を配布し、「生きる力」、「リーダーシップ」、「運動・スポーツに求めるもの」、「専門知識・技術」について自己評価を求め、3日間の講習会後に同様の調査項目に再度自己評価させ、講習会の成果を検証した。

②の統制群についても同様の調査項目に自己評

価させ、講習会参加者のプレ・ポスト得点と比較することで効果を検証した。

③の参与観察では、参加者群の個人的態度変容（積極性、集団へ関わり具合、リーダーシップの発揮されている場面、指導者の態度や言葉がけに対する反応）について3日間の変化を時系列で観察し記録した。

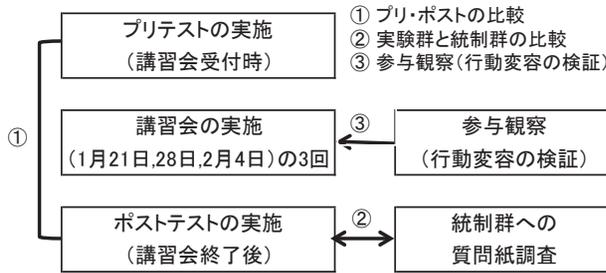


図1 研究計画のプロセスと内容

### 3-2 調査対象

神戸市立中学校に通う中学2年生を対象に、KJSL講習受講者30名を参加者群とし、講習を受講していない一般生徒と運動部所属生徒計86名を統制群とした。

### 3-3 調査方法

(1)調査日：KJSL講習会時の平成24年1月21日、1月28日、2月4日の3日間。

(2)プリ・ポスト調査：講習会初日（平成24年1月21日）のオリエンテーション開始前に調査票を記名付きで記入させたあと封入し、最終日（2月4日）の閉講式後に再度調査票を配布し、記入後に回収した。

(3)統制群への調査：事前に協力校（A校）に依頼し、講習会終了後の平日に指導教員のもと調査票を記入させた後回収し、3週間後に再度記入させたものを回収した。

(4)参与観察：4名の観察者（研究者と後期課程院生）がコーディネーショントレーニング講習中の参加者の受講場面の観察により、個人の態度変容とリーダーシップの現れ方について、ビデオ映像とあわせて、質的なアプローチによる分析を行った。

### 3-4 質問紙調査

#### (1)調査項目および尺度

表2は本研究における調査項目および尺度を示している。個人的属性として、「性別」、「スポーツ歴」、「今行っている運動・スポーツ種目」、「運動・スポーツを始めた理由」、「今後やりたいスポーツ」、「部活動やクラブへの入部状況」、「部活動やクラブでの地位」をたずねた。

さらに、プレ・ポスト調査項目として、「生きる力」、

「リーダーシップ特性」、「運動・スポーツ時に気をつけること」、「専門的知識・能力」を設定した。「生きる力」は、独立行政法人国立青少年教育機構（2010）による「IKR評定用紙（簡易版）」より24項目を採用した。「リーダーシップ特性」、「運動・スポーツ時に求めること」、「専門的知識・能力」については、Sport & Recreation New Zealand（2003）の「Kiwi Sport Leadership Workbook」を参考に設定した。「生きる力」、「リーダーシップ特性」、「運動・スポーツ時に求めるもの」については、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階尺度を設定した。「専門的知識・能力」については、「かなり持っている」から「まったく持っていない」の4段階尺度を設定した。加えて、KJSL講習会について意見や感想を自由記述で求めた。

最後に、静岡県掛川市総合型地域スポーツクラブの中高生を対象にしたプログラムを参考に調査項目の精選を行った。

表2 調査項目および尺度

要因	項目	尺度
個人的属性	性別	1.男 2.女
	スポーツ歴（幼稚園、小学校、中学校）	自由記述
	今行っている運動・スポーツ種目	自由記述
	運動・スポーツを始めた理由	1.自分でしたいと思ったから、2.家族にすすめられたから、3.友達がいっていたから、4.先生や指導者にすすめられたから、5.その他
	今後やりたいスポーツ	自由記述
生きる力	部活動やクラブへの入部状況	1.学校の部活動、2.地域のスポーツクラブ、3.民間のスポーツクラブ、4.その他
	部活動やクラブでの地位	1.主将・キャプテン、2.副主将・副キャプテン、3.レギュラー、4.補欠、5.マネージャー、6.その他
	①いやなことは、いやとはっきり言える。②人のために何かをしてあげるのが好きだ。③先を見通して、自分で計画が立てられる。④通さずや来たに負けない。⑤誰にでも話しかけることができる。⑥多くの人に好かれている。⑦人の話をきちんと聞くことができる。⑧自分のことが大好きである。⑨自分からすすんで何でもやる。⑩いやがらずによく働く。⑪早寝早起きである。⑫自分勝手な言いがまを言わない。⑬小さな失敗をおそれない。⑭人の心の痛みがわかる。⑮自分で問題点や課題を見つけることができる。⑯とても痛いケガをしてもがまんできる。⑰失敗しても立ち直るのが早い。⑱誰にでも仲良くできる。⑲その場にふさわしい行動ができる。⑳誰にでもあいさつができる。・前向きに物事を考えられる。・自分に割り当てられた仕事はしっかりとやる。・体を動かして疲れにくい。・お金やモノのむだ使いをしない。	1.まったくあてはまらない 2.あまりあてはまらない 3.まああてはまる 4.非常にあてはまる
リーダーシップ・キャラクター	①私は、今の自分に満足している。②私は、他の人の気持ちや欲求に敏感な方である。私は、他の人とうまくつき合っている方である。④私は、何事もやり始めたことは最後までやり遂げよう努力する。⑤私は、チームやグループで何かを決める時は率先して自分の意見や考えを言う。⑥私は、何かをする時に他の人を引っ張っている方である。⑦私は、何かをする時に他の人をする気にさせる方である。⑧私は、他の人の進みについて我慢強い方である。⑨私は、他人より技術や知識がすぐれている。⑩私は、計画を立てたり、メンバーをまとめるのが得意だ。⑪私は、チームやグループの目標に向かって行動するのは楽しい。⑫私は、何かをする時に他の人のお手本になろうと思う。⑬私は、運動・スポーツについて自信を持っている方である。⑭私は、自分の目標に向かって向上したい。⑮私は、何でもやり始めたことには最善をつくす	1.まったくあてはまらない 2.あまりあてはまらない 3.まああてはまる 4.非常にあてはまる
運動・スポーツ時の自己評価	①うまくなること。②勝つこと。③体力をつけること。④友達と仲良くなること。⑤チームをまとめること。⑥友達や後輩を教えること。⑦難関を維持すること。⑧チームワークを身につけること。⑨スポーツを楽しむこと。⑩団体行動を身につけること。⑪礼儀やマナーを身につけること	1.まったくあてはまらない 2.あまりあてはまらない 3.まああてはまる 4.非常にあてはまる
専門的知識・能力	①ウォーミングアップ・クーリングダウン。②コミュニケーション能力。③ストレッチング。④コーディネーショントレーニング。⑤安全確保やケガの予防に関する知識。⑥食事にに関する知識。⑦栄養に関する知識。⑧リーダーシップ。⑨救急処置に関する知識	1.まったく持っていない 2.あまり持っていない 3.まあ持っている 4.かなり持っている

### 3-5 分析方法

まず、受講者の属性の単純集計を行い、次に、参加者群のプレ調査とポスト調査の結果、統制群のプレ調査とポスト調査の結果を比較するためにt検定を行った。また、自由記述についてはKJ法を用いて分析を行った。

4. 結果及び考察

4-1. 受講者の属性

KJSL 講習会受講者の性別は、男子 66.7% (n=20), 女子 33.3% (n=10) となっており、男子の方が多かった (図 2)。

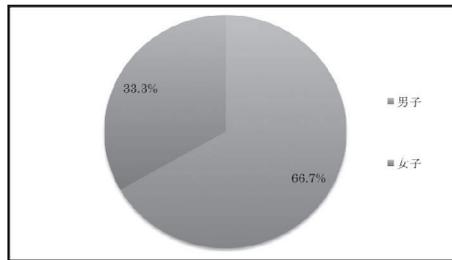


図 2 性別

受講者の過去、現在の運動・スポーツ経験をたずねたところ、表 3 より幼稚園時代及び小学生時代、中学生時代の運動・スポーツ経験を示している。順に最も多いのは「野球」15.6% (n=5), 以下「サッカー」、「空手」、「テニス」、「バスケットボール」が 9.3% (n=3) の順である。中学で最も多いのは「陸上」18.6% (n=6) である。以下順に、「バレーボール」と「テニス」12.5% (n=4), 「野球」、「バスケットボール」、「柔道」9.3% (n=3) となっている。幼稚園時代は特に決まった運動・スポーツを行っておらず、小学生時代より何らかの特定の運動・スポーツを始めた受講者の多いことが推察される。

また現在行っている運動・スポーツ種目で最も多い種目は「陸上」25.0% (n=8) となっている。第 2 位は「バスケットボール」15.6% (n=5), 第 3 位は「バレーボール」と「テニス」12.5% (n=4), 第 5 位は「野球」と「柔道」9.3% (n=3) である。

今後行ってみたい運動・スポーツの第 1 位は「サッカー」、「バレーボール」、「ハンドボール」が 12.5% (n=4) となっており、チームスポーツに対する実施希望が高い。第 2 が 6.2% (n=2) で「ソフトボール」、「テニス」、「ボクシング」、「ラグビー」、「柔道」、「野球」、「陸上」が並んでいる。

表 3 各年代の運動・スポーツ経験 (複数回答)

幼稚園		小学校		中学校		現在		今後	
種目	% (n)	種目	% (n)	種目	% (n)	種目	% (n)	種目	% (n)
サッカー	3.1% (1)	野球	15.6% (5)	陸上	18.6% (6)	陸上	25.0% (8)	サッカー	12.5% (4)
ダンス	3.1% (1)	サッカー	9.3% (3)	バレーボール	12.5% (4)	バスケットボール	15.6% (5)	バレーボール	12.5% (4)
器械体操	3.1% (1)	空手	9.3% (3)	テニス	12.5% (4)	バレーボール	12.5% (4)	ハンドボール	12.5% (4)
空手	3.1% (1)	テニス	9.3% (3)	柔道	9.3% (3)	テニス	12.5% (4)	ソフトボール	6.2% (2)
体操	3.1% (1)	バスケットボール	9.3% (3)	バスケットボール	9.3% (3)	野球	9.3% (3)	テニス	6.2% (2)
縄跳び	3.1% (1)	卓球	9.3% (3)	柔道	9.3% (3)	柔道	9.3% (3)	ボクシング	6.2% (2)
剣道	3.1% (1)	柔道	6.2% (2)	サッカー	6.2% (2)	サッカー	6.2% (2)	ラグビー	6.2% (2)
		陸上	6.2% (2)	ダンス	3.1% (1)	空手	6.2% (2)	柔道	6.2% (2)
		バレーボール	6.2% (2)	剣道	3.1% (1)	剣道	3.1% (1)	野球	6.2% (2)
		剣道	3.1% (1)					陸上	6.2% (2)
		水泳	3.1% (1)					スケート	3.1% (1)
								ダンス	3.1% (1)
								バスケットボール	3.1% (1)
								フィギュアスケート	3.1% (1)
								弓道	3.1% (1)
								水泳	3.1% (1)
								新体操	3.1% (1)
								ゴルフ	3.1% (1)

さらに今行っている運動・スポーツ種目を始めた理由をたずねたところ、「自分でしたいと思ったから」が 71.8% (n=23) で最も高い割合を示し、以下「友達がしていたから」が 9.3% (n=3), 「家族にすすめられたから」、「先生や指導者にすすめられたから」、「その他」が 6.3% (n=2) となっている (図 3)。自分からすすんで運動・スポーツを始めたことがわかる。

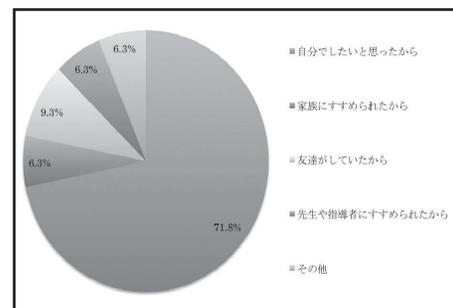


図 3 運動・スポーツを始めた理由

図 4 は、学校部活動やクラブへの入部状況を示している。「学校部活動」に入部している者が 93.1% (n=27) となっており、ほとんどの受講者が学校部活動に入部していることが理解できる。約 7%ではあるが、学校部活動と地域のスポーツクラブの両方に入部している受講者も存在している。

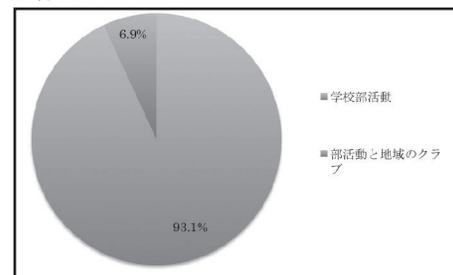


図 4 入部状況

図 5 は、学校部活動やクラブにおける役割をたずねた結果である。46.7% (n=14) が「主将・キャプテン」となっており、本受講者の約半数が主将・キャプテンであることがわかる。以下順に、「副主将・副キャプテン」36.7% (n=11), 「レギュラー」13.3% (n=4), 「補欠」3.3% (n=1) となっている。今回の参加者については比較的リーダーシップをとる場面が多く、運動能力も高い生徒が集まっているといえる。

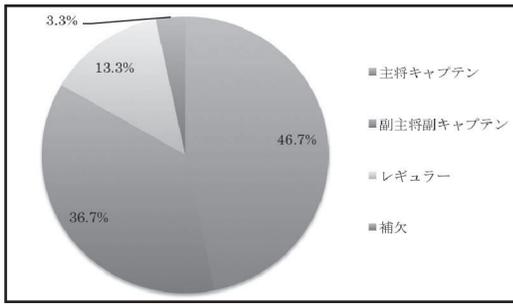
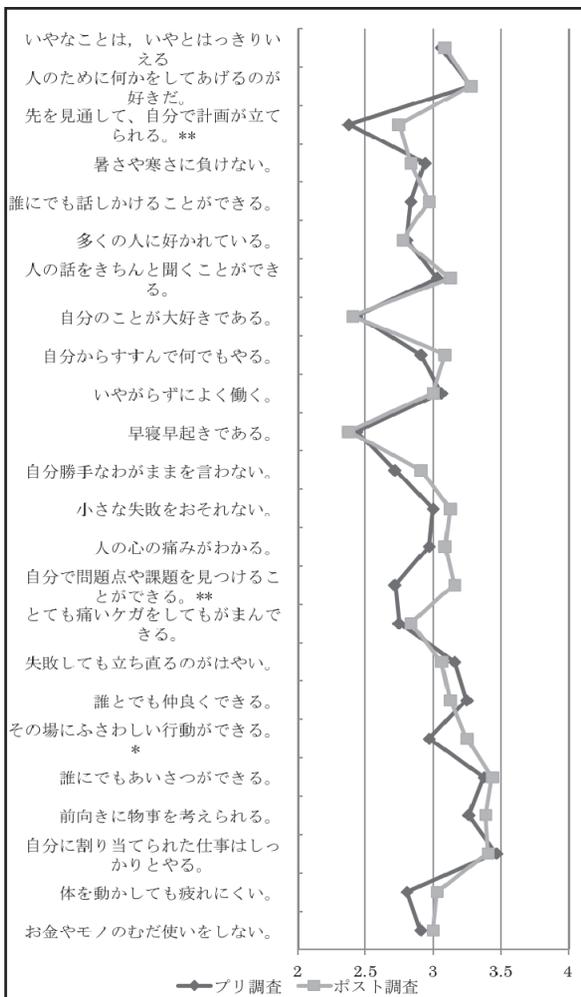


図5 部活動やクラブにおける役割

#### 4-2 生きる力

図6は、参加者群における「生きる力」のプリ・ポスト調査の結果である。受講前と受講後で統計的に有意な差がみられた項目は、5%水準で「その場にふさわしい行動ができる」、1%水準で「先を見通して、自分で計画が立てられる」と「自分で問題点や課題を見つけることができる」、であった。心理的社会的能力の高まりが見られ、「視野・判断」力の高まりが見られる。

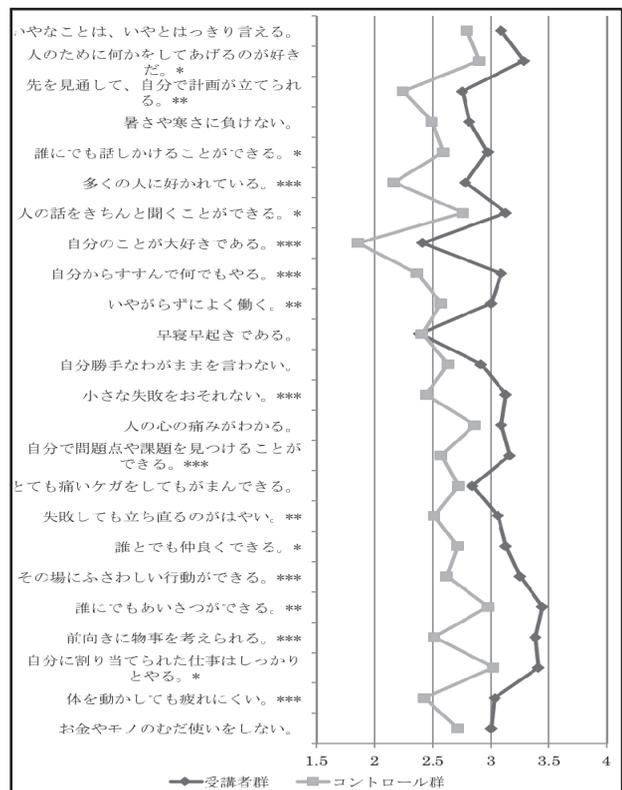


\*p<.05 \*\*p<.01

図6 「生きる力」プリ・ポスト結果の比較

図7は、受講者群と統制群における「生きる力」のポスト調査の平均値の差を示している。統計的に有意

な差がみられたのは、5%水準では「人のために何かをしてあげるのが好きだ」、「誰にでも話しかけることができる」、「人の話をきちんと聞くことができる」、「誰とでも仲良くできる」、「自分に割り当てられた仕事はしっかりとやる」、1%水準では「先を見通して、自分で計画が立てられる」、「いやがらずによく働く」、「失敗しても立ち直るのがはやい」、「誰にでもあいさつができる」、0.1%水準で「多くの人に好かれている」、「自分のことが大好きである」、「自分からすすんで何でもやる」、「小さな失敗をおそれない」、「自分で問題点や課題を見つけることができる」、「その場にふさわしい行動ができる」、「前向きに物事を考えられる」、「体を動かしても疲れにくい」となっている。受講者群の方が統制群よりも値が高く、心理的社会的能力が全般的に高まっているのがわかる。日常生活においても活動的であることがうかがえる。



\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

図7 受講者と統制群における「生きる力」のポスト調査の比較

#### 4-3 「リーダーシップ特性」

図8は、参加者群の「リーダーシップ特性」のプリ・ポスト調査の結果である。受講前と受講後で統計的に有意な差がみられた項目は、5%水準で「今の自分に満足している」と「私は、他の人より技術や知識がすぐれている」、1%水準で「私は何かをする時に他の人を引っ張っていく方である」と「私は、何かをする時に他の人をやる気にさせる方である」、であった。講習会

を受講したことにより、技術や知識が身につく、自分に満足し、主将や副主将として他の人をやる気にさせ、引っ張っていく自信がついたことがうかがえる。

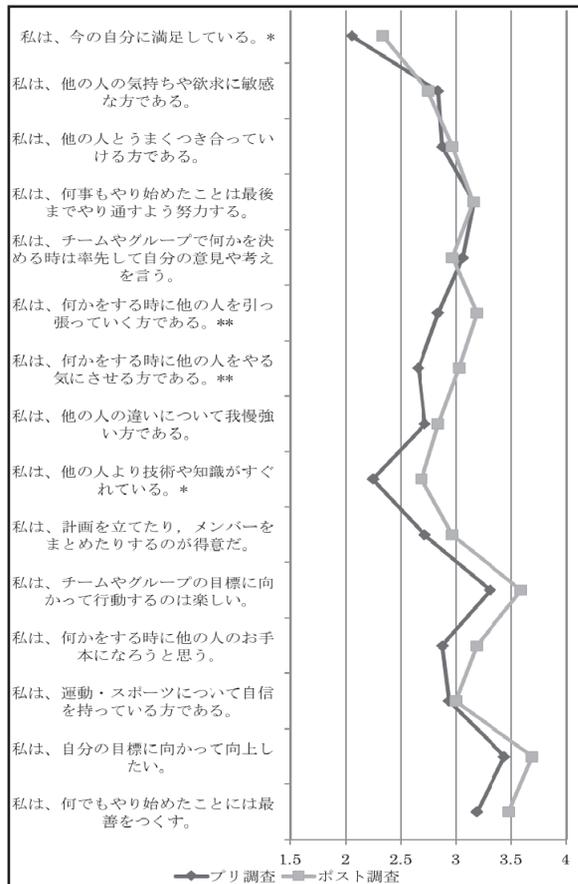


図8 「リーダーシップ特性」プリ・ポスト結果の比較

図9は、受講者群と統制群における「リーダーシップ特性」のポスト調査の平均値の差である。すべての項目において統計的に有意な差がみられた。5%水準では「私は、今の自分に満足している」、「私は、他の人の違いについて我慢強い方である」、1%水準では「私は、他の人とうまくつき合っている方である」、0.1%水準では「私は、何事もやり始めたことは最後までやり通すよう努力する」、「私は、チームやグループで何かを決める時は率先して自分の意見や考えを言う」、「私は、何かをする時に他の人を引っ張っていく方である」、「私は、何かをする時に他の人をやる気にさせる方である」、「私は、他の人より技術や知識がすぐれている」、「私は、計画を立てたり、メンバーをまとめたりするのが得意だ」、「私は、チームやグループの目標に向かって行動するのは楽しい」、「私は何かをする時に他の人のお手本になろうと思う」、「私は、運動・スポーツについて自信を持っている方である」、「私は、自分の目標に向かって向上したい」、「私は何でもやり始めたことには最善をつくす」となっている。受講者群の方が統制群より「リーダーシップ特性」がす

ぐれていることが推察される。

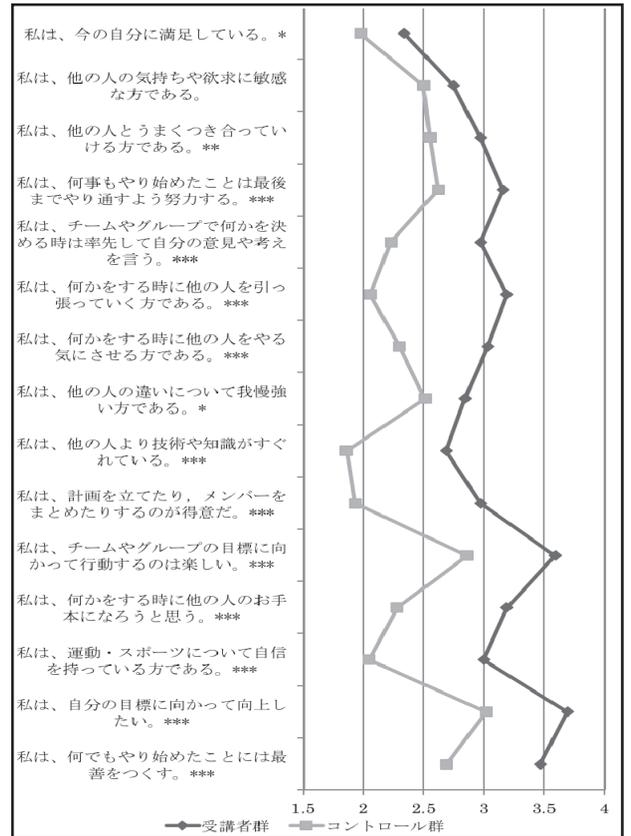
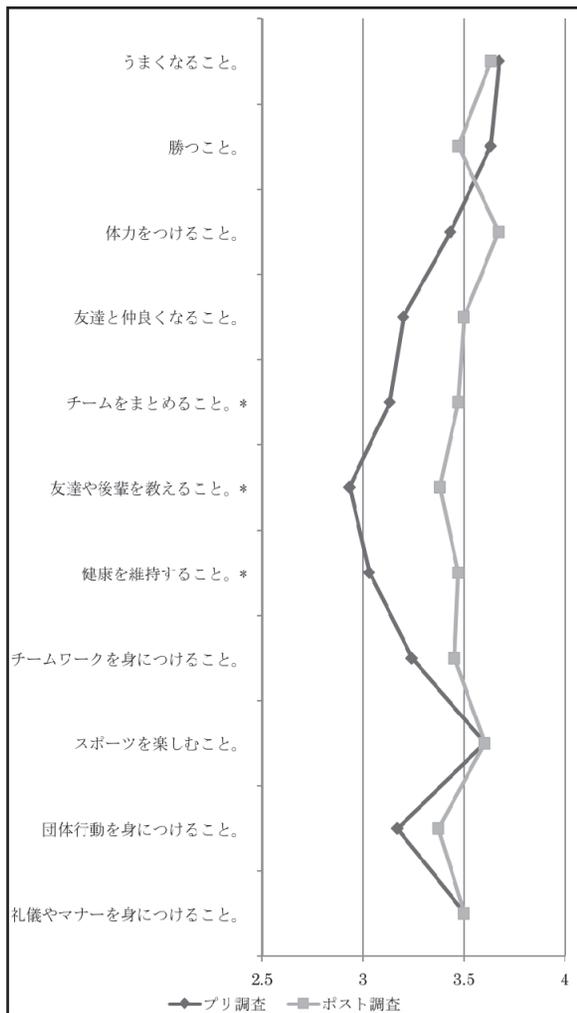


図9 受講者と統制群における「リーダーシップ特性」のポスト調査の結果比較

#### 4-4 運動・スポーツに求めること

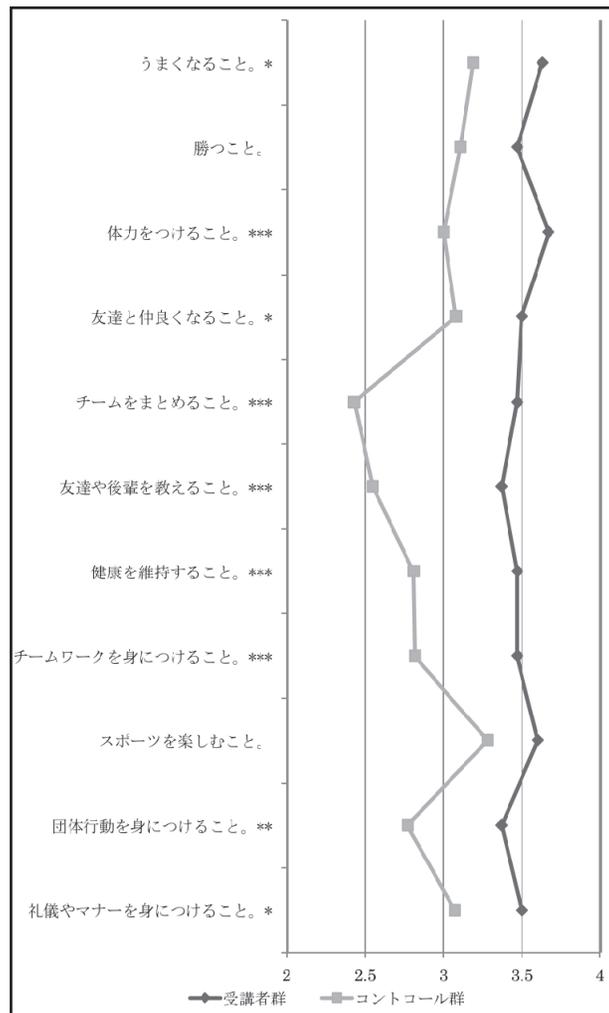
図10は、参加者群における「運動・スポーツに求めること」のプリ・ポスト調査の結果である。受講前と受講後で統計的に有意な差がみられた項目は、5%水準で「チームをまとめること」、「友達や後輩を教えること」、「健康を維持すること」であった。講習会を受講し、「自分自身の健康管理」、「チームメイトへの配慮」、「チーム・マネジメント」に対する意識が高まったことがうかがえる。

図11は、受講者群と統制群における「運動・スポーツ時に求めること」のポスト調査の平均値の差である。統計的に有意な差がみられたのは、5%水準では「うまくなること」、「友達と仲良くなること」、「礼儀やマナーを身につけること」、1%水準では「団体行動を身につけること」、0.1%水準では「体力をつけること」、「チームをまとめること」、「友達や後輩を教えること」、「健康を維持すること」、「チームワークを身につけること」となっている。受講者群の方が統制群よりも積極的に運動・スポーツに取り組んでいることがうかがえる。



\*p<.05 \*\*p<.01

図10 「運動・スポーツ時に求めること」プリ・ポスト結果の比較



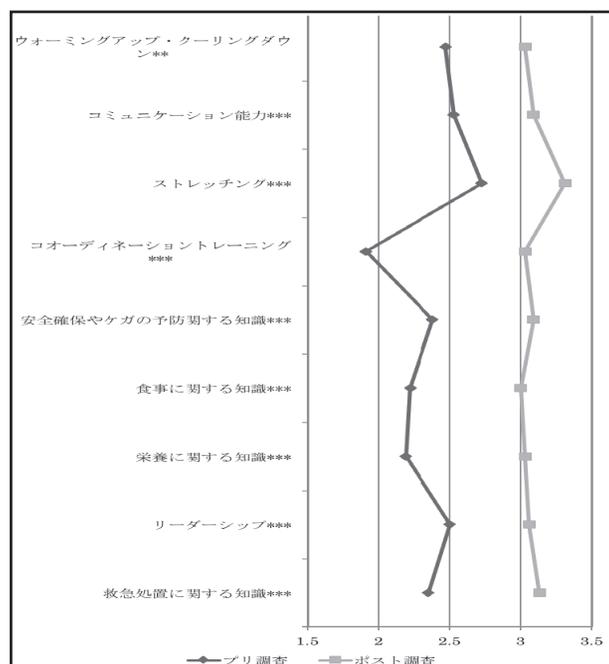
\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

図11 受講者と統制群における「運動・スポーツ時に求めること」結果の比較

#### 4-5 専門的知識・能力

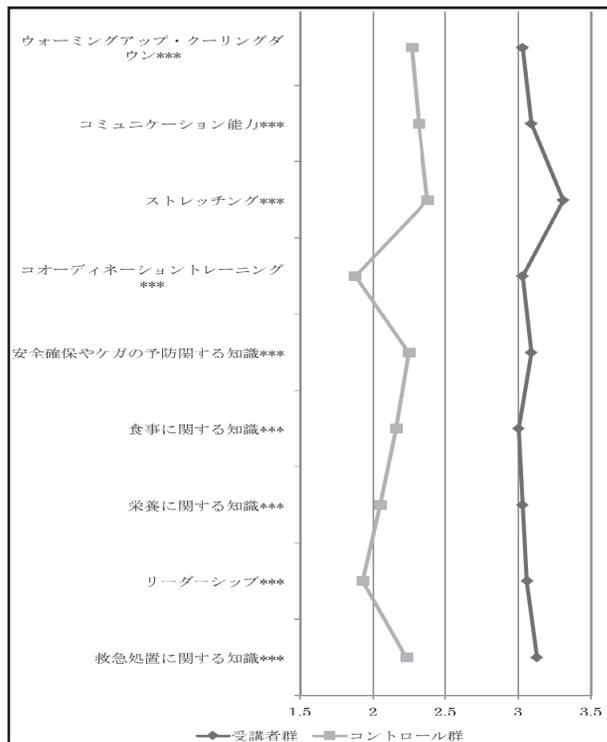
図12は、「専門的知識・能力」のプリ・ポスト調査の結果である。すべての項目において受講前と受講後で統計的に有意な差がみられた。講習会を受講することで、専門的な知識や技術が身についたことが理解できる。

図13は、受講者群と統制群における「専門的知識・能力」のポスト調査の平均値の差である。すべての項目において0.1%水準で統計的に有意な差がみられた。受講者群の方が統制群よりも専門的な知識や能力を身につけていることがうかがえる。



\*\*p<.01 \*\*\*p<.001

図12 「専門的知識・能力」プリ・ポスト結果の比較



\*\*\*p&lt;.001

図13. 受講者と統制群における「専門的知識・能力」のポスト結果の比較

#### 4-6 参与観察結果

4名の観察者がすべての参加者群について分担して観察を行った。その結果は、ほぼ回を追うごとに得点が高く、態度変容がおきている傾向にあったが、特に変化のあった、またはなかった参加者のケースについて特記する。

##### 事例1：リーダーシップ行動評価 低→中→高 (評価者A)

1人で参加した女子生徒で1日目は説明を受けたことは、そつなく取り組んでいるが、集団にとけ込む様子はなく、やや緊張気味。2日目についてもまじめに取り組んでいるが、グループの中で目立つ存在ではない。3日目の指導実習では、動きの説明を積極的にこなすようになり、チーム内の誰よりもわかりやすい説明で、しかも楽しそうに教えていた。指導者の説明に対して声を出して反応するようになった。一番変化がみえた生徒の評価。

##### 事例2：リーダーシップ行動評価 低→中→高 (評価者B)

15人参加中学の女子生徒。1回目は課題には集中して取り組んでいるが、表情が硬く、リーダーシップを発揮する場面もなく、集団への関わりも低かったが、2回、3回と回を重ねるごとに表情が明るくなり、3日目の指導実習では終始笑顔で対応できるようになった。

##### 事例3：リーダーシップ行動評価 中→中→中 (評価者C)

15人参加中学の男子生徒。体格が良いこともあるが、1回目から目立つ生徒。口数が多く、動きの説明を受けた後も素早く動くことができる。運動能力は高いが集団に影響を及ぼすようなリーダーシップは発揮できない。2,3回目についても前半は集中できるが後半遊んでしまうという傾向は変わらなかった。

##### 事例4：リーダーシップ行動評価 低→低→低 (評価者C)

2人で参加の男子生徒。1日目はグループ編成をしていなかったこともあり、同じ中学の生徒のそばから離れられず、ペアを作るときも、終始いっしょであった。2日目から異なる班になったため、少しずつ他の生徒との関わりはできてきたが、自分のことが精一杯でリーダーシップを発揮するまでには至らない。3日目の指導実習では表情が硬く、見本を見せられない場面もあり、かなり緊張気味であった。

以上の事例から全体を推察すると、1回目については、初めての出会いでもあり、班編成もできていなかったため、同じ中学から参加した生徒以外は終始緊張を強いられたと思われる。しかし、アイスブレイクの時間に名前を覚える、少人数で関わりを持つというアクティビティをこなすことによって、かなり打ち解け、初めてであった者と声を掛け合うまでになっている。

2日目は、講義、実技終了後、班ごとにスタッフも交えて「弁当タイム」をもうけたことで、班内での声かけの機会も増え、コミュニケーションがとりやすい雰囲気が出てきた。

3日目は、指導体験を行う中で、自ずと声かけの機会ができ、全員に指導場面を与えることによって、お互いを理解しようとする機会につながった。

属性からも、もともと、参加のモチベーションが高く、コミュニケーション能力の高い集団であったことがわかるが、講習中のプログラムが参加者の態度を変えたことは明白である。

#### 4-7 自由記述による講習会評価

まず講習に対する自由記述を内容ごとに大きく「満足群」と「要望群」の2つのカテゴリーにわけた。さらに「講習会全般」、「講習内容」、「交流」、「体験・経験」それぞれに分類シラベルを付けて整理したものが図14である。

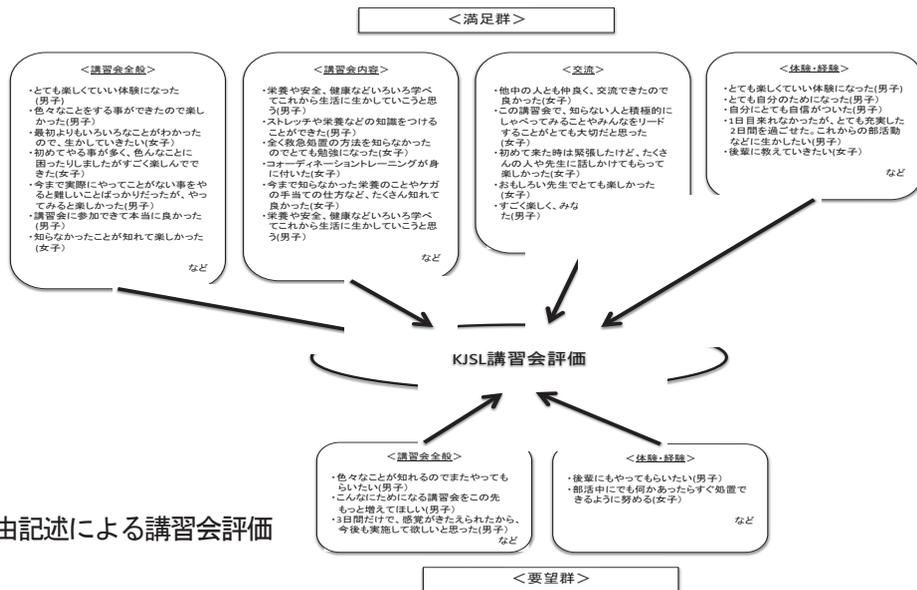


図 14 自由記述による講習会評価

否定的、マイナスの評価につながる意見は皆無であり、参加者全員が満足を感じている。KJSL 講習会は、中学 2 年生に有能感をもたせ、運動・スポーツに新たな興味関心を持たせるのに有効なプログラムであったことがわかる。

## 5. まとめ

平成 22 年度より神戸市では「こう講習会 (KJSL)」が運営、実施されている。本講習会は、神戸市内の中学 2 年生を対象とし、学校部活動や地域のスポーツクラブなどで活躍できるスポーツリーダーを育成することを目的としている。

本研究の目的は、KJSL 参加の中学生を通して、ジュニア世代が求める運動・スポーツに対する専門的知識の内容とレベルを明らかにし、専門的能力を身につけるためのプログラム効果を量的、質的アプローチの両面から検証することにある。

平成 23 年度 KJSL 講習会において参加中学生のプリ・ポスト調査を実施し、「生きる力」、「リーダーシップ特性」、「運動・スポーツ時に求めること」、「専門的知識・能力」に対する評価を測定した。さらに講習中の参与観察を実施することで受講生のリーダーシップの行動変容の裏付けを行い、加えて講習会非参加者を統制群として質問紙調査を行い、KJSL 講習会における効果の妥当性を高めることとした。以上のことから次のことが明らかになった。

1. 「生きる力」測定では、心理的社会的能力の高まりが見られ、「視野・判断」力の高まりが見られた。また、受講者群の方が統制群よりも心理的社会的能力が全般的に高まっていた。
2. 「リーダーシップ特性」では指導実習の影響から「他の人を引っ張る」と「人をやる気にさせる」という指導力のアップが顕著であり、統制群よりもすべての項目ですぐれていた。
3. 「運動・スポーツに求めること」では「自分自身の健

康管理」、「チームメイトへの配慮」、「チーム・マネジメント」に対する意識が高まったことがうかがえ、統制群よりも積極的に運動・スポーツに取り組む姿勢がうかがえる。

4. 「専門的知識・能力」ではすべての項目において有意な差がみられ、統制群との比較においても講習会を受講することで、専門的な知識や技術が身につくことが明らかである。

5. 観察参与では、受講生全体が回を重ねるごとに緊張感が解け、積極的に集団に関わりを持てるようになってきた。中でもコーディネーショントレーニングにおける指導実習は、コミュニケーション力を身につける動機づけになっていた。

## 参考文献

- 笹川スポーツ財団(2010)『青少年のスポーツライフ・データ 2010』
- 山口泰雄ら(2011), こうベジュニアスポーツリーダーに関する調査報告書-縦断的アプローチ-, 神戸大学総務企画部調査研究・広報課調査研究係(2010), 体験活動による「生きる力」の変容が見える「生きる力の測定・分析ツール」, 独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 橘直隆, 平野吉直, 関根章文(2003)「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」, 野外教育学会, 野外教育研究 6-2

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。